

「縁・えにし」のよろこび

【仏教婦人会総会＆法座】

4月5日（火）に仏教婦人会総会＆法座を開座しました。午前中の総会では、新役員様のご紹介がありました。また、午後にはご講師に木下明水師（熊本・勝明寺）をお迎えし、心温まる阿弥陀さまお慈悲のお取り次ぎをいただきました。

旧役員様、本当にお疲れ様でした。新たな役員様のもと、今年度もスタートします！



講師：木下 明水師



総会の様子



新役員様

【永代経法要】

4月25日（月）～27日（水）の3日間、ご講師に渡辺崇之師（朝倉市・浄覚寺）をお迎えし、永代経法要を開座しました。ご講師は、副住職が入会している「布教研究会・法水会」のメンバーのお一人で、臨場感溢れる法話をされる若手布教使です。有り難いご縁でした。



講師：渡辺 崇之師

【お同行志・三部経法事】

真教寺では、毎月16日（6、10月は休座）に定例法座を開座しています。5月は、1年間に往生されたご門徒様をご縁に浄土三部経のお勤めをしています。

本年の5月16日（月）は、7名の方々を偲びました。ご家族の皆さまとともに、尊い仏縁を賜りました。



ご家族の皆さまより御供えして頂いたお饅頭を、法座後皆さんにお配りしました



お名前		地区
川上 美佐子 様		上梶原
築地 敏恵 様		下梶原
川口 すみ卫 様		下梶原
川口 柳 様		下梶原
白水 ミツギ 様		中原
岩崎 ミツ卫 様		五郎丸
金丸 寛 様		仲



阿弥陀さまからのお手紙

『お盆に想う』

広島市・妙蓮寺 高橋 哲了

全国でいろんなお盆の風習があることと思います。私が今住んでおります広島市近辺ではお盆には、紙と竹でこしらえた「とうろう」を、持ってお墓参りをいたします。ちなみに私の育った山口県北部の村では毎年八月十五日の夜、盆踊りに先立って、麦わらで作った大きな舟をたくさんの色紙で飾り立てて、灯りをつけ、お供物をいっぱい載せて、これを川に流す行事が行われていました。その賑やかな風景を見ながら子ども心になぜうちの寺では舟を流さないんだろうと不思議に思っていたことを覚えています。

お盆は、正しく盂蘭盆といえます。ウラボンとは、ウランバナというインドの言葉が語源です。その意味は倒懸（とうけん）、さかさぶりということです。倒さに吊るされるような非常な苦しみ

をいいます。そのことが説かれたお経を『盂蘭盆経』といいます。この『盂蘭盆経』にはお釈迦様の十大弟子のお一人で、神通第一といわれた目連尊者が、亡くなった母親を餓鬼（がき）道から救いだされるお話が説かれています。六神通力を得られた目連尊者は父母を救って、育てられたご恩にむくいようとなされます。目連尊者が神通力をもって世間をごらんになると、亡くなった母親が餓鬼道に生まれて、何にも食べられず、骨と皮にやせ細って、先の倒懸の苦しみを味わっておられるのを見られました。なんとか母を助けたいと、目連尊者は鉢に食物をもって母親に食べさせようとしたしますが、母親がその鉢をとって口もとへ

もってゆき、食べようとしたしますと、火にかわって食べることができません。目連尊者は大変悲しまれ、泣け叫びながら、お釈迦様のもとに、はせ還られこのことをくわしくお話されました。お釈迦様は「あなたの母親は大変罪が深く、あなた一人の力ではどうすることもできない。例えあなたの親孝行の声が天地を動かしたとしても、天の神、地の神、その他の方々にもどうすることもできない。ただ十方衆僧（たくさんのお坊さん）の威神力（功德の力）で救いうるのみ」とお示しなされた後、お釈迦様は、「あなたのために、救いの方法を説き、母親を苦しみから救い罪を除こう」と言われます。お釈迦様がおられた当時の僧侶は、安居（あんご）といって、雨期の三カ月の間は、外出すると草木や虫を知らず知らずに踏み殺すおそれがあるので、そのような殺生を避けるため洞窟や寺院に籠って仏教の修行に専念しておりました。一定の場所に集合して、食物や寝具の供養をうけ遊行中の罪をさんげし、仏教の教えを聞いて研鑽（けんさん）を重ねます。この安居の終わった日、七世の父母の為に、飲食百味（さまざまな食物）をそなえ、又、この期間僧侶たちはわずかな食物と、きびしい修行にあげられて、身体も衰えていますので、この時に食物をはじめ寝具等をお供えて衆僧を供養せよとお釈迦様はおっしゃいました。

目連尊者がお釈迦様のお示し通り、安居の最後の日の七月十五日、衆僧を供養した功德によって母親は餓鬼道から救われたと『盂蘭盆経』には説かれます。

お盆はこの『盂蘭盆経』の故事によって始まった行事です。

このようなことから、いろんなお盆の行事が行われるようになりました。目連尊者をまねて、餓

鬼に食物を施すのを、施餓鬼（せがき）といいます。先程申しあげましたように、私が子どもの頃見ていたのもこの施餓鬼の一種だったのです。う。お浄土には餓鬼の世界はありませんので、真宗寺院で施餓鬼の行事はありません。当然といえば当然のことですがそれに気づいたのはずっと後のことでした。

また、盆に餓鬼をむかえて、物を施す意味から、一般には死んだ先祖をむかえ、霊をなぐさめる行事になっていったのです。盆踊り等はこれにあたります。また、迎えるというところから、迎え火、送り火等の行事も始まったのでしょう。

これらは、みんなそれぞれの土地の風習と、先の『盂蘭盆経』の故事が一緒になって始まったものです。

しかし、浄土真宗で大切なことは、お盆は死者の霊を慰めたり、餓鬼に施しをすることではありません。『盂蘭盆経』の一番大切なお示しは、釈迦十大弟子といわれ、神通第一とうたわれた目連尊者でさえも自力で母親を救い得なかったというところにあるのではないのでしょうか。

また、目連尊者の母親が特別に罪深かったということではなく、いつの世にも子ども一人を育てるために、親は地獄や餓鬼の世界に赴く程の行いをせずにはいられないということではないでしょうか。「かならず救う我にまかせよ」と「南無阿弥陀仏」と呼んでくださる阿弥陀様のお呼び声をいただいて、今ここに私がある全てのご縁をいただいた懐かしい方々と共に、浄土で会わせて頂く身の幸せを喜びお念仏申させて頂くのが浄土真宗のお盆の本義であります。

※この法話を書かれた高橋 哲了師は、三大法要（10月29、30日）のご講師です。

『みほとけとともに』第3巻より